スポーツを通して鹿児島市民の健康増進、活力あるまちづくりを目指す

SPORTS × KAGOSHIMA

vol.7
2024.1

巻頭特集

かごしま国体と今後の鹿児島ラグビー界

桑水流 裕策さん

特集②

燃ゆる感動かごしま国体・かごしま大会を支えた人々

令和5年度 イベントレポート

インラインフィギュアスケート体験会ほか

スポーツくじ WINNER toto BIG

「SPORTS×KAGOSHIMA」は、スポーツ振興くじ助成金を受けて作成しています。

ラグビーにかけてきた情熱を鹿児島の未来のスポーツへ注ぐ。

元 7人制ラグビー日本代表・かごしま国体代表

桑水流 裕策さん

3年越しに開催された「燃ゆる感動かごしま国体」。大会名の改称で、「国体」と呼ばれるのは今回で最後となりました。同じく今大会が選手として最後のプレーとなった、ラグビーフットボール成年男子の桑水流裕策さん。実は2021年に現役を引退していましたが、県ラグビー協会の郷之原理事からの熱いオファーもあり、今回の国体復帰が決まりました。そんなお二人に見事準優勝に輝いた鹿児島チームの軌跡を語っていただきました。

ーお二人にとって「かごしま国体」はどんな大会でしたか？

桑水流　元々はコロナがなければ2020年のはずだったので、そこに向けてチームを作ってきたと思います。でも気持ちを切らすことなく、鹿児島成年男子チーム「Brave Seven Kagoshima（ブレイブセブン鹿児島）」の存在を示すことができた大会だったと思います。

郷之原　選手たちが小学生の頃から2020年に向けて強化していたので、延期になった当初はやはり残念な気持ちはありましたね。でも2020年の開催だったら、東京五輪を目指していた桑水流さんは参加できなかったんです。2023年だったからこそ参加できた。そういう意味では3年待った甲斐のある、かごしま国体だったと思います。

決勝戦は三重との対決。12対12で決着がつかずに試合は延長線へ。サドンデスで惜しくも12対17となったが、3連覇を狙う三重を相手に胸を張れる結果となった

ー地元開催というプレッシャーはありましたか？

桑水流　地元開催だからというプレッシャーはあまり感じませんでしたけど、2021年に現役を引退しているので、復帰する方にプレッシャーを感じていました。

郷之原　プレッシャーはもちろんありました。2016年の岩手国体で準優勝して以降、「優勝して当たり前」という空気になっていましたけど、そこから予選を勝てずにいたので。でも諦めたくはありませんでした。私だけずっと「日本一」を言い続けてきましたね。周りは少し冷ややかな目線ではありましたけど（苦笑）でもここ1、2年はみんなも「日本一を目指そう！」と言うようになりましたね。だから苦しいこともちゃんと乗り越えようという雰囲気になってきました。

ー郷之原理事の強い気持ちが実を結びましたね。桑水流さんのスカウトに関してもずっと強い気持ちでオファーを続けたそうですね。

郷之原　2016年からずっとスカウトしていました。ちょうどリオ五輪が終わった頃からです。リオ五輪では、桑水流さんは7人制ラグビーの日本代表主将として出場し、4位入賞という好成績を残してくれました。ようやく桑水流さんの気持ちが固まったのは、かごしま国体の3ヶ月前。7月に開催された北海道の大会でのことでした。この北海道の大会には鹿児島県代表チームも出場していたのですが、「タイミングが合えば、鹿児島代表の選手としてプレーしてほしい」と伝えていたんです。

桑水流　私は今、女子ラグビーチーム「ナナイロ プリズム福岡」のヘッドコーチを務めているのですが、北海道での大会はそのヘッドコーチとして参加していました。事前に郷

之原さんから打診はあったので、スパイクは準備して行きました。でもみなさんが期待しているようなプレーは正直できないと思っていたんです。7人制は15人制と比べてスピードが必要です。2年のブランクがあると迷惑をかけるかもしれないという不安もありました。あと、「10人しかいない出場枠を自分が出ると・・・」という思いも少なからずありました。

ーでも実際にプレーしてみたら、その不安は杞憂に終わったのですね？

桑水流　そうですね。自分で思っていた以上にいい意味でギャップがありました。「まだできるな。これならチームに貢献できるかも」という実感があったので、藤崎総監督にお願いしました。

郷之原　もう別格でしたよね。そのひと言に尽きます。北海道の大会の2日後には、『桑水流復活』とメディアが報じていました。かごしま国体に向けて、「最強ドリームチームを作ろう！」と私を含めみんなが言っていたのですが、これで本当に最強チームになったと感じました。桑水流さん含め、東芝ブレイブルーパス東京に所属する桑山聖生選手、さらに2016年当時は鹿児島大学の学生だった三浦選手や久津和選手がずっとこのチームにいてくれたことも大きかったですね。

ーそこから3ヶ月間でどのようなチームづくりを目指したのですか？

桑水流　普段は「ナナイロ プリズム福岡」のヘッドコーチの仕事があるので、日曜日の練習に参加していました。プレーではチームを引っ張れないと思っていたので、試合中は全力でプレーし、グラウンドの外では試合のリカバリーやストレッチ、水分補給などについて、みんなに積極的に声をかけるようにしていました。国体は1日3試合あるので、試合後の対応が次の試合にも大きく影響します。たとえば氷水で体を冷やすアイスバスなども、「こういうタイミングで、こうした方がいい」などのアドバイスをするよう心がけていました。

郷之原　こういうサポート一つにしても、日本トップレベルのものを落とし込んでくれるのでありがたいですよね。絶対的な信頼感と仲間を巻き込む力があるんです。チームメイトからしても、「桑水流さんがいるから大丈夫！」という精神的な柱になったと思います。

ーそうして迎えた「かごしま国体」。試合の感想を教えてください。

桑水流　今回私は監督兼選手という立ち位置で臨んだのですが、ほぼ選手でしたね。藤崎総監督からは、「裕策は裕策のプレーをしてくれたらいい」と言われました。そのアドバイスどおり、自分らしいプレーを心がけました。まずは1日目の初戦、広島戦に集中しました。広島は去年の準優勝チームだったので。あいにくの雨でしたが、初戦だけど落ち着いてプレーできたと思います。練習の裏付けもあり、結果として0点で抑えることができました。初戦をいい形で勝てたら、どんどん良くなるチームなんです。好循環となって決勝戦まで行くことができました。決勝戦で戦った

チームメイトの柱として、技術的にも精神的にもサポートした桑水流さん。試合中はもちろん、グラウンドの外で次の試合を待つ合間も仲間を鼓舞し続けた

三重のチームは、リーグワンの三重ホンダヒートの選手たち。トップチームを相手に延長線まで引っ張って、あれだけの試合ができたのは、チームみんなの自信にもなったと思います。悔しいけどいい試合になりました。

郷之原　決勝トーナメントの栃木戦と東京戦は、全部計算して計画的に試合を運べました。日本一を言い続けてきたから最後は悔しかったですが、いいゲームでしたね。

ー女子チームの応援も支えになったのでは？

桑水流　とても心強かったですね。女子チームの応援に引っ張られて、周りのみんなも応援してくれました。女子チームが作詞作曲してくれた応援歌もあったんですよ。国体前は男子チームと一緒に練習しましたし、女子チームから学ぶことも多かったです。女子ラグビーチームの「ナナイロ プリズム福岡」のコーチをしていても感じることですが、女子の方が純粋に「ラグビーが好き！」という人が集まっているように思います。「もっとラグビーがうまくなりたい」というピュアな気持ちが、一緒に接していると伝わってくるんです。ラグビーを始めた頃のワクワクした気持ちをずっと持ち続けながらプレーできるのは素晴らしいことだと思います。

桑水流さんと県ラグビー協会の郷之原理事（右）。郷之原理事からの熱いオファーが実を結び、今回のかごしま国体出場そして準優勝へとつながった

－これから鹿児島ラグビー界をどのように盛り上げていきたいですか？

郷之原　現在、男女ともに良い選手たちが県外の高校に行ってしまうことが多いんです。みんなに鹿児島に残ってもらえるような環境づくりが大切だと思います。特に女子に関しては、企業が採用してくれるようになるといいですね。ラグビーを続けられる環境を整えることが必要です。

桑水流　鹿児島のラグビーに携わりたいという想いはもちろんあります。その上で、ラグビーに限らずスポーツの楽しさや喜びを伝えていけたらと考えています。スポーツをすることで人生を豊かにし、生涯を通してスポーツを楽しむことをみなさんに伝えていきたいという想いから、2022年に会社を立ち上げました。大人になると、スポーツをする機会が大幅に減ると思います。日本におけるスポーツといえば部活が多いですが、社会人になってからこそスポーツをするべきなんです。仕事でのストレスを発散し、スポーツを通じて人生をより楽しくより豊かにするお手伝いをしたいです。

－具体的にはどのような活動を行っているのですか？

桑水流　企業においては、「会社の運動会」を開催したりしています。コロナ禍の影響で社員同士のコミュニケーションが減ってきているので、運動会は喜ばれますね。ワークライフマネジメントが重視されるこれからの時代は、社員の健康や余暇をサポートするのも会社の大切な役割となります。また社会人向けだけではなく、子どもたちに向けても活動しています。「スポーツテイスティング」といって、さまざまなスポーツを試食するように経験できる、新しい形のスポーツの楽しみ方です。「スポーツテイスティング」は、鹿児島の民間の学童とも契約して行っています。3ヶ月周期で年間4つの競技を体験していく方法で、ラグビー、次は剣道、その次はゴルフ、そして陸上と体験できるようになっています。

－7人制ラグビーの普及にも尽力されているそうですね。

桑水流　国内に先駆けた7人制ラグビーリーグへと発展させて競技力の向上につなげるべく、2021年に「Kyusyu Island 7’s」の大会を開催しました。第1回、第2回は福岡で開催したので、2024年には国体のレガシーとして鹿児島で開催する方向で現在すすめています。こちらは郷之原さんにもご協力いただいています。

郷之原　7人制は15人制とグラウンドの広さは一緒ですが、運動量が全然違います。とにかく走るんです。7人制には7人制に向いた選手が必要なんです。

－最後に今後の目標について教えてください。

郷之原　来年の国体改め国民スポーツ大会「国スポ」は佐賀での開催です。出場チームが減るのですが、今回このような好成績を収めたので次につなげていきたいですね。子どもたちが見て「かっこいい」と思ってもらえるようなチームにしたいです。

桑水流　繰り返しになりますが、私がラグビーで学んだことを伝えていきたいです。技術に限らず、スポーツを純粋に楽しむ心や、スポーツには人生を豊かにする力があることを多くの方に知っていただきたいですね。20年の競技生活で培ったことを子どもたち、そして社会に恩返ししていけたらと思います。

2023年11月に開催された「小学生スポーツ体験会」（主催：鹿児島市スポーツ振興協会）にゲストとして参加した桑水流さん。15分間のデモンストレーションを行ったほか、ラグビーのブースでは子どもたちにラグビーの楽しさを伝え交流を深めた。「小学生スポーツ体験会」ではラグビーの他にも18種目から体験できるようになっており、子どもたちの「やってみたい！おもしろそう！」というスポーツへの興味関心を高めるイベントとなった

桑水流 裕策 さん（くわずる・ゆうさく）

1985年生まれ、鹿児島県出身。鹿児島工業高校から福岡大学に進学し、その後コカ・コーラレッドスパークスへ。大学在学時にセブンズ日本代表に初選出される。2016年にブラジルで開催されたリオデジャネイロオリンピックにキャプテンとして出場し、4位入賞を果たす。現在は女子ラグビーチーム「ナナイロ プリズム福岡」でヘッドコーチを務めながら、企業や子どもたちにスポーツの楽しさを伝えるイベントや講演会を行っている。

郷之原 茂樹 さん（ごうのはら・しげき）

1956年生まれ。鹿児島県立宮之城高校ラグビーに入部し競技生活がスタート。花園に主将として出場。その後専修大学に進学しラグビー部入部。鹿児島にて就職し、クラブチームで競技する。現在、鹿児島県ラグビーフットボール協会の理事 強化委員長として鹿児島のラグビー界を牽引している。伊田食品株式会社勤務。